



FESTIVAL TOKYO 14

フェスティバル／トーキョー14



境界線上で、あそぶ

演劇 × ダンス × 美術 × 音楽...に出会う30日間!

舞台芸術の新たな可能性に出会う

国境、世代、ジャンルを超えて多様な価値が出会い、刺激しあうことで新たな可能性が拓かれる場をめざす国際的な舞台芸術祭、フェスティバル/トーキョー14。今回は、東日本大震災を機に福島の現在と未来を世界に発信するため結成された「プロジェクト FUKUSHIMA!」による大規模なフェスティバルで盛大に幕を開ける。その後は、世界初演を迎える新作を多数ラインナップ。演劇・ダンス・美術・音楽など各分野で注目の創り手たちが共同創作を行う。アルカサバ・シアター(パレスチナ)と若手演出家・坂田ゆかりが挑む『羅生門 藪の中』、『春の祭典』(P6参照)、チャーホフの名作を大胆に読み替えるミニヤナイハラプロジェクトの『桜の園』、ダンサーの森川弘和が美術家・杉山至とのタッグで臨む『動物紳士』など、次なる表現を目標する場となるだろう。加えて西尾佳織による『透明な隣人 ~8 -エイト-によせて~』や、第57回岸田國士戯曲賞ノミネート作品の青森中央高校演劇部版『さらば! 原子力ロボむつ ~愛・戦士編~』(渡辺源四郎商店)、これらの

気鋭作家たちと並びピーター・ブルックや蜷川幸雄といった現代演劇の巨匠たちが名を連ねるなど、国内外から多彩なプログラムが集結。また、舞台作品のほかシンポジウム、映像特集「痛いところを突くークリストフ・シュリンゲンジーフの社会的総合芸術」、3夜連続トーク「舞台芸術のアートマネジメントを考える」、関連講座「まなびのアトリエ」など、様々な形で参加できるプログラムを存分に堪能できる30日間となる。

アジアシリーズVol.1! 多元芸術とは

今年から独自のリサーチと様々なネットワークを活用した「アジアシリーズ」を開始。初年度の今回は、2000年代に入って注目されるようになった韓国発の多元(ダウオン)芸術を特集する。演劇やダンス、映像などといった既存の芸術分野に分類することができない作品すべてを指す多元芸術においては、作品の構成要素は根幹から混ざりあっており、単なる複数ジャンルの横断にはとどまらないところが特徴。そのアウトプット方法も既存の枠には収まらない。今回の特集では、多元芸



術を牽引してきたソ・ヒョンソクによる、観客が自らの足で都内のある地域を巡って体験するサイトスペシフィックなツアーパフォーマンスをはじめとして、最注目の若手クリエイター集団クリエイティブ・ヴァキによるドキュメンタリー的な作品、そして韓国伝統舞踊とコンテンポラリーの感性を持ち合わせた作品創作に定評のあるイム・ジエによる、「動きのアーカイブ」をテーマとした新作をラインナップ。昨年の公募プログラムでアワードを受賞し、今回イブセンの名作に挑戦する中国の新伝実験劇団や、めまぐるしい情勢の変化とともに近年注目を集めているミャンマーの気鋭のアーティスト、モ・サなども合わせて、F/T14は、アジアの舞台芸術の新たな潮流に一挙に触れる機会となる。

脳の謎を追う「驚愕の谷」で、演出家ブルックの魔術にかかる体験を!



光と音も共感覚を絶妙に表現。

ピーター・ブルックが提唱する「なにもない空間」(※註1)では、最小限の装置と澆刺と弾む俳優が、観客の想像力を無限に伸ばす。その簡素な舞台では光や音も素晴らしい効果を発揮して、「見えないものが見える」現象が起きる。「演劇の神様」とブルックが呼ばれる理由は、実験を重ねて到達した手法を89歳の今なお進化させる情熱にもありそうだ(※註2)。

5月にパリのブッフ・デュ・ノール劇場で見た新作『驚愕の谷』(共同脚本・演出、マリー=エレーヌ・エティエンヌ)には、科学と神秘が出合う深遠な世界が広がる。脳の不思議な動きを素材にした舞台は、人間の肉体と精神を巡る冒険旅行さながら。

未知の領域を表すのは、3人の俳優と2人の音楽家。俳優それぞれが複数の役を担い、音楽もクラシック、ジャズ、タンゴ、即興と多彩

に変化。俳優のキャサリン・ハンターとマルチェロ・マーニは、野田秀樹演出『THE BEE』英語版などで、日本でも親しまれる。主人公サミー(ハンター)は並外れた記憶力をもつ共感覚者。共感覚者はひとつの刺激で複数の感覚を知覚し、音に色を感じたり、数字に匂いを感じたり……。医療の被験者でもあるサミーは記憶力を披露する芸人になって、消えない記憶に苛まれる。最先端科学も救えない少数者の孤独に迫る一方で、ブルックならではの愉快な演出も。マジシャンに扮したマーニがトランプ手品に観客を参加させる場面は、爆笑に包まれる。

共感覚の持ち主は、独特の観点で周囲を捉え芸術家になるケースも多い。音楽性あふれるカラフルな絵を描いた画家カンディンスキー(1866~1944)もその一人。本作の準備中ブルックはスタッフ・キャストとともに共感覚者たちに会い、繊細な感受性に魅せられた。「普通の人」にとって何でもないものに美

を見出す共感覚者を演じる俳優たちは、陶酔の波動を客席に送り筆者を震えさせた。劇中には12世紀ペルシャの詩人アッタール作『鳥の言葉』が引用される。王を探す鳥たちが試練を経るうちに欲望を捨て聖なる存在と化す物語詩は、『驚愕の谷』終盤の清澄な宇宙に呼応。「雨の一滴」の豊穡を語る俳優の声に続いて、土取利行が吹く笛は情報に囚われた現代人の脳を洗い浄め、思考と知覚の力を蘇らせるように響いた。

※註1、この言葉を題に冠した本は1968年に発表され、「現代演劇のバイブル」と呼ばれる(「なにもない空間」(畠文道著)ピーター・ブルック著、高橋康也・喜志哲雄訳)。 ※註2、息子サイモン・ブルックが監督したドキュメンタリー「世界一受けたいお稽古」は、ブルックが俳優を導く過程を映像化(9月から渋谷イメージフォーラムほか全国順次公開)。

文:桂真菜(舞踊・演劇評論家)



共感覚者サミーを演じるキャサリン・ハンター(右)。

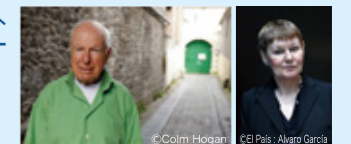
フェスティバル/トーキョー14「驚愕の谷」詳細はP13へ

11月3日(月・祝)~6日(木) プレイハウス

作・演出:ピーター・ブルック、マリー=エレーヌ・エティエンヌ

音楽・演奏:ラファエル・シャンブーヴェ、土取利行

出演:キャサリン・ハンター、マルチェロ・マーニ、ジャレッド・マクニール



ピーター・ブルック (左) マリー=エレーヌ・エティエンヌ (右)

“近代バレエの傑作”を更新する!若手女性アーティストの挑戦



複雑に変化するリズム、不協和音を駆使し、西洋音楽の伝統を打破したストラヴィンスキーの傑作バレエ音楽『春の祭典』。その獨創性、エキゾチシズムは、バレエ・リュスでの初演を担ったニジンスキーをはじめ、名だたる振付家の創作意欲を刺激し続けている。今回新たにこの作品に挑むのは、躍動感とユーモアあふれる作品づくりで定評のある振付家・白神ももこ、廃材や機械部品を素材にオーガニックな空間を演出する美術家・毛利悠子、人間の声や呼吸を生かした「生」の音を追求する音楽家・宮内康乃の3人。プリミティブな「祝祭」「生贖」の物語は、近未来の日本を舞台に「再生」のイメージも加えた新版として私たちの眼前に現れる。

フェスティバル/トーキョー14「春の祭典」詳細はP13へ | 11月12日(水)~16日(日) プレイハウス 白神ももこ(演出・振付)×毛利悠子(美術)×宮内康乃(音楽)

アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団) フェスティバル助成 平成26年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

FESTIVAL TOKYO 14

フェスティバル／トーキョー14

11月1日(土)~30日(日)

会場:東京芸術劇場、あうるすぽっと、にしすがも創造舎、シアターグリーン、アサヒ・アートスクエア ほか
お問合せ:F/Tチケットセンター 03-5961-5209
公式HP: http://festival-tokyo.jp

フェスティバル/トーキョー14 オープニング

福島ー東京。未来へ向けて、重なり、膨らむフェスティバル!
「フェスティバルFUKUSHIMA!@池袋西口公園」

11月1日(土)~2日(日)池袋西口公園

総合ディレクション:
大友良英・プロジェクトFUKUSHIMA!
※雨天決行、荒天中止

入場無料

主催:フェスティバル/トーキョー実行委員会、豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 後援:外務省、公益財団法人日本芸術家協会、東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)、J-WAVE 81.3FM